

# 1. 評価結果概要表

作成日 平成19年12月6日

## 【評価実施概要】

事業所番号	2672300106
法人名	社会福祉法人みねやま福祉会
事業所名	グループホームかえで
所在地	〒627-0111 京都府京丹後市弥栄町溝谷3581 (電話) 0772-65-4111

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町上ノ口上る梅渡町83-1 ひと・まち交流館京都		
訪問調査日	平成19年10月4日	評価確定日	平成19年12月7日

## 【情報提供票より】(平成19年9月1日事業所記入)

### (1) 組織概要

開設年月日	平成 16 年 3 月 1 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	14 人	常勤 14 人, 非常勤 0 人, 常勤換算	13.9 人

### (2) 建物概要

建物構造	鉄骨造り
	1 階建ての 1 階部分

### (3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	21000円	その他の経費(月額)	円	
敷金	有( 円) ○ 無			
保証金の有無 (入居一時金含む)	○有( 15万 円) 無	有りの場合 償却の有無	有 / ○無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	1200円			

### (4) 利用者の概要(9月1日現在)

利用者人数	17 名	男性 2 名	女性 15 名
要介護1	6 名	要介護2	4 名
要介護3	3 名	要介護4	3 名
要介護5	1 名	要支援2	0 名
年齢	平均 83 歳	最低 71 歳	最高 93 歳

### (5) 協力医療機関

協力医療機関名	京丹後市立弥栄病院
---------	-----------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

北近畿丹後鉄道(KTR)峰山駅から車で15分くらい、広々とした田んぼのなかに平屋建ての和風のグループホームが建っている。かえでの木がある中庭を囲んで住空間があり、居室にはテラスがあり、花のプランターを置いたり、洗濯物を干したり、日光浴をしたりと利用者は楽しんでいる。地域住民には認知されており、行事の参加やおすそ分けなどの交流がある。この春に大勢の職員異動があったこともあり、家族との信頼関係を構築することに努力している。20代から50代の男女の職員は法人の特養から異動してきた人が多いが、明るく、元気が良い。食事には力を入れており、季節感のあるおいしい献立である。課題は認知症ケアについての更なるレベルアップをはかることと、医療連携の確立である。

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前2回の評価の際の指摘については、ホーム内の空間の活用、排泄パターンの把握、外出機会を増やすこと、職員の認知症ケアの研修強化等については適切に改善されている。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	今回の自己評価については、ユニット会議で職員が話し合いまとめている。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	区長、民生委員、老人クラブ会長、隣組組長、京丹後市保健福祉部高齢福祉課課長、家族がメンバーとなり、運営推進会議が立ち上げられている。メンバーからは活発な意見が交わされている。会議の記録はいいねいに残されている。会議の開催は半年に1回である。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	苦情相談窓口はあるが、家族の意見や苦情は出されていない。運営推進会議で家族が述べた意見として、「担当職員が誰に変わったのかを、教えてほしい」、「要介護度5になってもグループホームで暮らせるのか」などが出されている。グループホームからはきちんと回答されている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	町内会に加入し、行事に参加している。また地域の体育祭、文化祭にも積極的に参加している。月1回の老人会のあとに開催される「ひまわりクラブ」と称して、趣味の会などの企画があり、それに参加している。また社協主催の中学生高校生の体験学習の受入を行っている。近くの中学校の運動会にも参加させてもらっている。

## 2. 評価結果(詳細)

(  部分は重点項目です )

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
<b>1. 理念と共有</b>					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念は「より質の高い福祉サービスの提供、地域の人びとの心豊かで安心・安全な暮らしへの貢献、福祉の仕事に邁進できるよう職員の幸福追求」の3点がかかげられ、グループホームとしては「その人らしく、生き生きと……」となっている。しかし、契約書、重要事項説明書等には明記されておらず、ホーム内にも掲示はない。	○	法人の理念を踏まえ、グループホーム一般の意義をベースにして、「グループホームかえで」の独自の理念を、職員との話し合いにより策定し、契約書、重要事項説明書等に明記し、契約にあたっては十分説明するとともに、ホーム内に掲示し、パンフレットにも明記することによって、地域にも理解してもらうことが求められる。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	法人の理念とともに職員に対しては「管理よりも生活を」という方針が徹底されており、このことの実現にむかって、職員は業務を執行している。「その人らしい生活」のために、生活リズムを尊重したり、その人が生きてきた道からできることを探り出したりして、努力している。		
<b>2. 地域との支えあい</b>					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会に加入し、行事に参加している。また地域の体育祭、文化祭にも積極的に参加している。月1回の老人会のあとに開催される「ひまわりクラブ」と称して、趣味の会などの企画があり、それに参加している。また社協主催の中学生高校生の体験学習の受入を行っている。近くの中学校の運動会にも参加させてもらっている。		
<b>3. 理念を実践するための制度の理解と活用</b>					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の自己評価については、ユニット会議で職員が話し合いまとめている。前2回の評価の際の指摘については、ホーム内の空間の活用、排泄パターンの把握、外出機会を増やすこと、職員の認知症ケアの研修強化等については適切に改善されている。地域住民への啓発理解促進、グループホームの看板、市町村との連携などについては取り組み中である。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	区長、民生委員、老人クラブ会長、隣組組長、京丹後市保健福祉部高齢福祉課課長、家族がメンバーとなり、運営推進会議が立ち上げられている。メンバーからは活発な意見が交わされている。会議の記録はていねいに残されている。会議の開催は半年に1回である。	○	運営推進会議の要綱を作成し、メンバーには委嘱状を出すなど、当会議の意義を理解してもらうこと、利用者もメンバーに加えること、家族は固定メンバーにすること。会議は2か月に1回開催すること、欠席者には資料を送付することなどの改善が求められる。

京都府:グループホームかえで

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	弥栄町内の事業者が集まり、弥栄町主催の「ケア会議」が行われており、そこでは地域ニーズを把握し、できることを検討している。京丹後市とは共催事業はない。	○	地域の中心的存在として、行政に働きかけることによって、在宅で認知症の家族を介護している人の介護相談や地域住民への認知症啓発・理解の共催事業を開催することが求められる。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族の面会は少なくとも2カ月に1回はあるので、そのときに口頭で情報交換している。『かえで通信』は年4回、季節ごとにホームの状況を写真入りでお伝えしている。ここには利用者の俳句や行事報告、職員紹介などが掲載されており、家族には喜ばれている。預かり金の報告は毎月なされている。	○	利用者一人ひとりに担当職員が決められているので、請求書や預かり金報告の際に、手書きで利用者の様子を書いたものを送ることが望まれる。家族にとってはどんな情報も安心につながると思われる。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談窓口はあるが、家族の意見や苦情は出されていない。運営推進会議で家族が述べた意見として、「担当職員が誰に変わったのかを、教えてほしい」、「要介護度5になってもグループホームで暮らせるのか」などが出されている。少し情報交換が十分でなく、行き違いがあるようである。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人としては地域密着型サービスにおける職員異動のダメージを認識しており、なるべく退職しないように、また育成に力を入れるなどの方針をもっている。しかし、今年度初めに管理者の交代があり、また新事業の開設もあるなかで、職員異動が多く、家族や利用者は不安を感じている。半年が経過してようやく落ち着いてきた状態である。退職を防ぐために、風通しのよい職場を目指しており、話しやすい雰囲気や心かけると同時に、昼休憩を導入したり、シフトの調整に配慮している。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年度ごとの研修計画があり、法人内研修は充実している。外部研修にも職員が交代で参加し、レポートは残され、伝達研修も会議で行われている。法令理解、認知症ケア等、全国大会にも参加している。3年前から法人において人事考課が導入され、半年に1回、管理者との面接により、職員一人ひとりの課題が話し合われている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の特養やグループホームとの交流はなされている。他の法人の事業所との交流はない。	○	京丹後市内にあるグループホームの管理者と話す機会があり、お互いにもっと交流したいということで一致しているので、今後利用者も含めた交流が実現すると期待される。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	ショートの利用はおこなっていない。利用開始前の試し利用はない。利用が始まった後に、なるべく早くなじんでもらうためには、家で使っていたものを持ち込んでもらう、家族に足しげく面会に来てもらう、利用者の写真を部屋に貼ってもらう等々の取り組みをしている。		
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者が長い人生で培ってきた力に職員は尊敬の念をもっている。中学生の体験学習のときに利用者が丁寧に料理を教えていたこと、男性の利用者がグループホームの組長として行政の配布物を配ってくれること、赤ちゃんを見ると、ふだん黙っている人でも「おいで」「おいで」とろけるような笑顔が出ることなどに、職員は感動している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用の申込があれば健康診断書、歯科の診療情報、看護サマリー等の情報を収集し、面接した結果が記録に残される。ここには家族構成や認知症の状態、生活の状況、生活歴等が記録されている。介護計画の作成にあたっては、利用者や家族から希望を聞いている。東京センター方式のアセスメントに挑戦する予定であり、今後は生活歴の情報が膨らむことが期待される。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	利用開始時の情報と、全職員に意見を聞いてアセスメントをおこない、担当職員とケアマネジャーが介護計画案を作成する。その介護計画案を会議にかけ、全職員の意見を聞き、確定する。それを家族に説明している。家族からは具体的な希望は出ることが少ないが、職員からは利用者が前に住んでいた家を訪問しようとか、相撲の好きな人を大阪場所に連れて行こうとか、いろいろアイデアがでて、それを生かしている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画の見直しにあたっては、担当職員がアセスメントをし、本人や家族の意向を聞き、ケアマネジャーとともに作成している。それを会議にかけ、他の職員の意見を聞き、家族に同意を得ている。見直しにあたって評価がおこなわれておらず、定期的見直しも機関が1年となっている。	○	介護計画の見直しには、現在執行中の介護計画の評価が行われた後に、アセスメント等の検討に入ることが重要である。介護計画の評価の根拠となるのは毎日のケース記録である。ケース記録は介護計画に沿った内容で記録すること、利用者の行動だけでなく、表情や発言、またそれを職員がどう受け止めたか等を書くことが求められる。

京都府:グループホームかえで

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>3. 多機能性を活かした柔軟な支援</b>					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	かかりつけの理美容院への同行はおこなっている。緊急時の受診は同行しているが、定期的な受診は同行が困難であり、シルバー人材センターの利用を検討しているが、個人情報の関係で実現していない。配食はしていないが、家族が希望すれば食事は利用者と一緒に対応している。		
<b>4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働</b>					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への受診は家族に依頼するが、困難なときは同行している。いずれの場合もサマリーによる医師との情報交換を密接にしている。認知症専門医は与謝の海病院と連携している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	現在のところ方針はないが、利用者の重度化も進んでおり、グループホームとして「できること、できないこと」を整理し、説明しながら、家族に意向確認を始めている。延命治療は要らないという家族が多い。職員は不安も多いが、最期の看取りをしたい気持ちも強い。	○	医療連携の不十分な状況のなかで、ターミナルケアに取り組むことは大きな不安を伴うと思われるが、家族の意向確認とともに、職員間で十分話しあり、気持ちをひとつにすることが欠かせない。また、協力してくれる医師や看護師の確保が急がれる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
<b>1. その人らしい暮らしの支援</b>					
<b>(1)一人ひとりの尊重</b>					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報保護規定があり、職員からは誓約書をとっている。個人記録の保管は注意している。トイレ誘導の声かけは配慮している。居室には内側から施錠ができるようになっており、自分でかける人もいる。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよその日課は決まっているが、起床も就寝も利用者の自由である。朝は起床後にお茶を飲んでもらい、バイタルチェックをしている。		

京都府:グループホームかえで

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援</b>					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の買い物は職員と利用者が毎日スーパーに行っている。魚屋のフリー売りは便利に利用している。献立は地域色に溢れた季節感のある和食が多く、野菜が豊富で味つけも彩りも良い。職員もともに食事をしながら、会話を喚起している。共用食器は陶器製、お箸やお湯飲みは個人の持ち込みである。外食も時には宮津まででかけたりしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴時間は大体午後に設定しているが、夜間入浴も希望があれば応じている。また毎日でも入りたい人には支援している。マンツーマンの同性介助をしている。		
<b>(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援</b>					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	掃除、洗濯物干し、洗濯物たたみ、食事時の食卓拭き、配膳、盛り付け、日めくりの管理、畑の草取り、新聞を取り込む、行事のときのあいさつ係等々の役割ができて果たされている。風船バレーやゲーム、カラオケ、手芸、学習療法等の楽しみも支援されている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	食材等の買い物は毎日職員と利用者が交代で行っている。毎週車でドライブに出かけている。季節ごとの行事として、花見や遠足、花火大会、特養の納涼祭、弥栄町の文化祭、初詣等に出かけている。ただ、冬季の降雪時には外出は見合わせており、なんらかの工夫が期待される。		
<b>(4) 安心と安全を支える支援</b>					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	道路からは塀も門扉もなく、玄関ドアは施錠されていない。勝手口は鍵がかけているが、利用者が開けることができるようにすることが期待される。利用者の居室からテラスに出ることができ、そこから外へはいつでも出ることができる。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	地域の消防団へ昨年度は1度協力要請をし、毎月避難訓練をしている。グループホームの建物は耐震構造になっている。地域との防災協定書、地域住民やボランティアの協力協定書、備蓄等は準備されていない。	○	グループホームの利用者を支援してもらうこととともに、地域の高齢者の避難所になることも想定し、グループホームとしてできることをまとめるとともに、防災協定書や協力協定書を締結し、備蓄や防災グッズの準備をすることが求められよう。

京都府:グループホームかえで

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援</b>					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人ひとりの食事摂取量は業務日誌に記録されている。水分は1日6回であるが、摂取量の記録はない。献立のカロリー値の記載もない。	○	毎日の記録は時間が必要であり、たいへんだとの思いがあるかもしれないが、水分摂取量と献立のカロリー値はぜひ記録に残すことが望まれる。
<b>2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり</b>					
<b>(1) 居心地のよい環境づくり</b>					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	田の真ん中に木造の平屋建てがグループホームである。玄関は親しみやすく、入ると下駄箱の上に花が生けられ、きれいな石の置物がある。バリアフリーの内部はソファがところどころに置かれ、食堂兼居間にある畳コーナーには座布団があり、冬はコタツになる。中庭にはかえでの木があり、紅葉が楽しみである。物置だったところにソファやテレビを置き、家族との交流の場にもなっている。畑では次々と野菜を植えて収穫している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	壁際に衣装ケースを並べ、壁には写真、絵、カレンダーを貼っている人、ベッドサイドに棚を置き、そのうえに料理のレシピ、俳句、歌手の名前、家族や親類の住所等を書いたメモを置いている人、亡夫の写真を飾り、お茶を供えている人、書棚に『暮らしの手帖』『東大寺写真集』『国語辞典』等の本をぎっしり並べ手いる人等々、それぞれが個性的に暮らしている様子がわかる。		